

「わたしは…上って行く」

～母の命がけの祈り～

「神には、なんでもできないことはありません。」ルカによる福音書 1章37節

本日は「母の日」です。また、女性の日と言ってもいいかもしれません。地球上には、男と女しか人間は存在しませんが、男性にとって女性が必要であり、掛替えのないパートナーでもあります。また、それは逆も言える訳ですが、私も男性の一人として、女性に対して心よりの感謝をお伝えしたいと思います。

聖書を見ますと、男性の弟子たちは12人と明確ですが、女性たちもしっかりとイエス様やお弟子さんたちのお世話をしたと書かれています。女性たちがいなかったら、今のようにキリスト教が広まらなかったとはっきりと語ることができます。

イエス様の十字架に最後まで従って行ったのは女性たちであり、また、埋葬の時も女性たちだけが最後まで見届けました。そして、よみがえりの朝、暗いうちに墓に行ったのも女性たちでした。そして、最初にイエス様のご復活を伝えたのも女性たちでした。

ラザロが死んで復活した時も姉妹のマルタとマリヤが活躍しました。また、何よりも、神の子イエス様を妊娠し、出産したのもマリヤであり、もちろん女性でした。

私の母は私を出産するときに、切迫流産になり、母子ともに危ない状況になりました。今から50年前、出産による事故も起こるまだまだ出産が危険な時代でもありました。『絶対安静』でじっとしていた時期が多かったそうで、なるほど私も寝ることが最も得意なことです。

子どもを生めば母体が危ない、すでに上に二人の子どもがいた両親にとっては、赤ん坊の命よりも、母親の命でした。そこには選択の余地はありませんでした。

しかし、『絶対安静』の中にいた母は、信仰の祈りを神に捧げました。「主よ、どうかこの子を無事に生ませてください。もし、この子を元気に出産できましたら、この子を一生あなたのものとして、お捧げいたします！」とハンナの祈りのような祈りをお捧げしたそうです。

そして、お医者様に頼んで、一ヶ月近く早く、私を帝王切開で出産しました。文字通り、命懸けの出産でした。しかし、主は祈りを聞かれ、二人を守り、命を与えてくださいました。

私の誕生には母の祈りがありました。そして、その祈りに主がお答えになり、主の手が天から差し伸べられた超自然的な出産劇でもありました。命を生み出す瞬間でもある出産。それは、どの出産をとっても神の手が動いた超自然的な出産ではないかと思います。私も妻が長女を生んだ時に立ち会いましたが、本当に物凄いパワーを感じました。霊的なものをそこに感じたことを憶えています。感動という言葉を超えたものでした。すべての人の人生は霊的なもの、神の御手が働いていると確信します！